

スイカ

芝山経済センター 営農指導員 山本 匠



農作業

テクニカルダイアリー



ナス

グリーンプラザ 第一集出荷センター 営農指導員 鈴木 広大

病害虫対策

ナスで多く見られるのは、アザミウマ類による食害です（写真①）。被害の特徴として果実や花にカスリ状の傷が生じ、葉には2～3ミリの細長い白色または褐色の斑点が生じます。対策としては、害虫の多発前から薬剤による早期防除を行う必要があります（表①参照）。

他にもコナジラミ類、アブラムシ類、ハダニ類等にも注意が必要です。また、薬剤防除のローテーション散布の中に、気門封鎖剤を取り入れることによって、さらなる防除効果が期待できます（表②参照）。

これらの農薬の効果を十分に発揮させるためには、あらかじめ目合いの細かい防虫ネットで微少害虫の侵入を防ぐこと、適切な濃度で希釀して使用すること、病害虫の発生初期に散布することが重要です。

また、害虫被害を最小限に抑えるためには、ハウス内や周辺の除草作業を行う等、「外から入れない」「中で増やさない」「外

へ出さない」「次作へつながない」という予防的な対策と、伝染経路を断つことを心掛けましょう。



写真①
アザミウマ食害（果実）

以降は日照時間が長く、密閉状態にすると夜間のハウス内の気温・湿度がともに上昇し、果皮が柔らかくなりやすいため注意する。

摘葉を控えて果実を葉で覆い、直接日光を避ける方法に、直接日光を避ける方法についてあまり効果が見られないとされており、ヤケ果の防止には、十分な換気によってハウス内の温度・湿度を下げることが重要です。



写真②
ヤケ果

播種に当たっては、使用する培養土や床土を消毒し、苗立枯病やつる枯病の対策をしましよう（表③参照）。また、使い古した資材は病気の発生を助長する恐れがあるため、苗床に敷いたり苗を

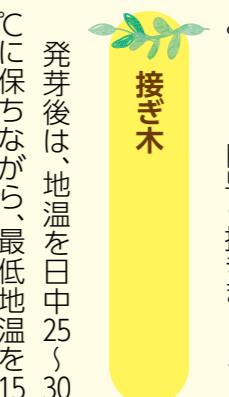
播種準備



写真③ 苗立枯病

播種前に当たっては、使用する培養土や床土を消毒し、苗立枯病やつる枯病の対策をしましよう（表③参照）。また、使い古した資材は病気の発生を助長する恐れがあるため、苗床に敷いたり苗を

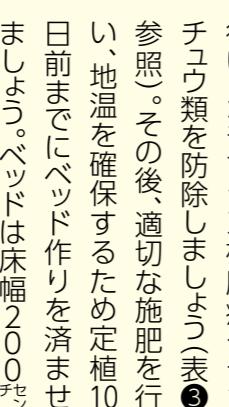
接ぎ木



写真④ 接ぎ木

播種に当たっては、使用する培養土や床土を消毒し、苗立枯病やつる枯病の対策をしましよう（表③参照）。また、使い古した資材は病気の発生を助長する恐れがあるため、苗床に敷いたり苗を

定植準備～定植



写真⑤ 定植準備～定植

表③ 苗立枯病・つる枯病に登録のある薬剤

薬剤名	対象病害虫	使用量・希釀倍数	使用時期	使用回数
オーソサイド水和剤80	苗立枯病	800倍(2L/m ² 灌注)	播種後から2～3葉期まで	5回以内
	つる枯病	600倍(散布)	収穫14日前まで	
ペンコゼブロアブル	つる枯病	600倍(散布)	収穫7日前まで	7回以内
DC油剤	ネグサレセンチュウ、ネコブセンチュウ	15～20L/10a(1.5～2mL/1穴)	作付10～15日前まで	1回
ドロクロール	センチュウ類、ホモプシス根腐病	3mL/1穴	下記(※)を参照	圃場1回以内
ネマキック粒剤	ネコブセンチュウ	15～20kg/10a	定植前	1回
		15～20kg/10a	定植前	1回

(※)注入部位を直ちに覆土し、地表面をポリエチレンやビニール等で被覆すること。地温が15℃以上の場合は処理後10日ほどで、地温が低い場合は処理後20～30日経過するとガスは大体抜けますが、念のためぐわを入れます。土質、気温等によってまだ臭気が残っている場合は、よく切り返して完全にガス抜きを行ってから、播種または移植すること。

表① アザミウマとコナジラミに登録のある薬剤

薬剤名	希釀倍率	使用時期	使用回数
スタークル顆粒水溶剤	2000倍	収穫前日まで	2回以内
モスピラン顆粒水溶剤	2000～4000倍		3回以内
ディアナSC	2500～5000倍		2回以内
アファーム乳剤	2000倍		2回以内
グレーシア乳剤	2000倍		2回以内
アベンジャーフロアブル	1000～2000倍		3回以内

表② 主な気門封鎖剤の種類

薬剤名	成分系統	主な特徴	対象害虫
サフォイル乳剤 サンクリスタル乳剤	油剤系 (調合油・脂肪酸グリセリド等)	油膜で気門を封鎖	ハダニ類 コナジラミ類 アブラムシ類
粘着くん液剤 エコピタ液剤	デンプン・多糖類	天然成分で包み込み動きを抑える	
フーモン ムシラップ	界面活性剤 (脂肪酸エステル等)	害虫の外皮を溶解し、気門を封鎖する	